

## 「慰安婦問題」の中で自らの政治的言説を強化している高橋論壇時評

高橋論壇時評はどうして秦郁彦の『慰安婦と戦場の性』に対して《ほんとうに、そうなのだろうか。》と疑うように、朝日が32年間も信じようとしてきた(?)「吉田清治発言」に対しても同じ疑問をどうして投げかけてこなかったのだろうか。彼自身、朝日と二人三脚で「吉田清治発言」に対しては、《ほんとうに、そうなのだろうか。》と一度も疑ってこなかったのだろうか。秦の《「正確な事実」に基づいているとする本》で、「吉田清治発言」に対して《ほんとうに、そうなのだろうか。》という疑問が投げつけられているのに、そして朝日が《「吉田清治発言」を「虚偽だと判断し、記事を取り消す」と発表した》のに、そのことには一切触れずに、いきなり秦の見解に《ほんとうに、そうなのだろうか。》という疑問を投げかけることには、釈然としないものが感じられる。

もちろん、高橋論壇時評のような疑問が湧き起こってきて当然なのであるが、しかし、時評では自身に向けられてくる疑問については不問に付したまま、秦の『慰安婦と戦場の性』に対してだけ、《ほんとうに、そうなのだろうか。》と疑問を発することは、フェアな態度とはとてもいえない。《深く知っているはずのないことについて、大声でしゃべ》らなくてもいいから、なにを書こうとも、自分を追い詰めることのない文章は虚しいということの《自戒》はもちつづけてほしいものである。

さて、高橋論壇時評を追って行こう。戦場へ赴いた数多くの日本人兵士の中にいた小説家たちによって書かれた小説で描写されている《同じ人間として生きる慰安婦たちの鮮やかな姿》が次のように取り出されていく。

《田村泰次郎は、次々と半ば強制的に様々な部隊の兵士の「慰安」の相手をさせられながら過酷な列車の旅を続けてゆく女たちを描いた「蝗」や、全裸で兵士たちと共に行軍を強いられる女の姿を刻みつけた「裸女のいる隊列」を書いた(⑤)。

強姦と殺戮が日常である世界を描いた田村と異なり、古山高麗雄の作品群には不思議な静けさが漂う。主人公の兵士である「私」は、戦場で自分だけの戒律を作った。「民間人を殺さない」こと、そして「慰安所に行かない」ことだ。それは「私」にとって「正気」でいるために必要な手段だった。そんな「私」は、慰安婦たちに深い同情と共感を覚える。なぜなら、「彼女たちは何千回となく、性交をやらされているわけだ。拉致されて、屈辱的なことをやらされている点では同じだ。(略)私たちが徴兵を拒むことができなかつたように、彼女たちも徴用から逃げることはできなかつたのだ」(⑥)。

戦後、「慰安婦問題」が大きく取り上げられるようになって、古山は「セミの追憶」という短編を書いた(⑦)。「正義の告発」を始めた慰安婦たちの報道を前に、その「正しさ」を認めながら、古山は戸惑いを隠せない。それは、ほんとうに「彼女たち自身のことば」だったのだろうか。そして、かつて、戦場で出会った、慰安婦の顔を思い浮かべる。

「彼女は……生きていたとしたら……どんなことを考えているのだろうか。彼女たちの被害を償えと叫ぶ正義の団体に対しては、どのように思っているのだろうか。そんな、わかりようもないことを、ときに、ふと想像してみる。そして、そのたびに、とてもとても想像の及ばぬことだと、思うのである」]

本当はそれらの作品を直接手にしながら、高橋論壇時評をみていったほうがよいのだが、いまはそれはかなわないので、高橋論壇時評の中に収められた文脈に即して小説の切り取られたごくごく一部を読み進めていくとして、時評ではそれらに対する筆者のコメントはとりたてて記されていない。だから、私は自分にむかってコメントを提出することにする。《戦後、「慰安婦問題」が大きく取り上げられるようになって》たときの古山の「セミの追憶」について、《「正義の告発」を始めた慰安婦たちの報道を前に、その「正しさ」を認めながら、古山は戸惑いを隠せない。それは、ほんとうに「彼女たち自身のことば」だったのだろうか。》と、高橋論壇時評で書かれていることに、私の関心は向かう。

古山は《「正義の告発」を始めた慰安婦たち》に対して、ここで《ほんとうに、そうなのだろうか。》と疑っているのである。自分が戦地で接してきた慰安婦たちと、《「正義の告発」を始めた慰安婦たち》とは異なるのではないか。自分の知っている慰安婦たちは「彼女たち自身のことば」はもっていなかった分、どのような悲惨な境遇であろうとも、体当たりで生きようとしていたが、だからこそ「私」

は、そんな《慰安婦たちに深い同情と共感を覚え》てきた。「私」も自分自身の言葉を奪われたまま、戦場で体当たりで生き長らえていくしかない下級兵士の一人であったからだ。

古山が《「正義の告発」を始めた慰安婦たちの報道》に戸惑いを隠せなかったのは、「正義の告発」などからは遠い戦場でさまよっている兵士であった自分を戦後もかかえこんで生きてきたからであろう。おそらく自分たちを兵士として駆り立ててきた世界もまた、「正義の告発」でさまざまに彩られてきたのであり、そのことを忘れてもし自分が「正義の告発」に立ち上がるとするなら、その自分はまた自分自身を別の戦場の兵士として駆り立てなくてはならなくなっていく。「正義の告発」を始めた別の戦場で慰安婦たちは「彼女たち自身のことば」をふたたび取り戻す機会を深く失いつつあるのではないだろうか。古山は《かつて、戦場で出会った、慰安婦の顔を思い浮かべ》ながら、戸惑いを隠せないのである。

だが彼はまた一方で、「私」が戦場で味わってきたことは、「私」以外の誰にもわからぬことであるように、慰安婦たちのことについても、彼女たち一人ひとり以外の誰にもわからぬことであるという内省はもちつづけようとする。だから、「彼女たちの被害を償えと叫ぶ正義の団体に対しては、どのように思っているのだろうか。」その「正義の団体」が彼女たち一人ひとり以外の誰にもわからぬことをどこまですくいあげて、大声で叫んでいるのか。「彼女たち自身のことば」ははたしてその正義の大声を受け入れているのだろうか。しかし、そのことも「わかりようもないこと」である。「そのたびに、とてもとても想像の及ばぬことだと、思う」と、古山が呟いている姿が私にはみえる。

古山が「とてもとても想像の及ばぬことだと、思う」と書いてから、20年が経過し、「正義の団体」が叫ぶ大声はもはや日本に向かってだけでなく、海外にも向かいはじめ、各地に慰安婦像や慰安婦碑が建てられる事態となっている。もし古山がいまも生きていたら、慰安婦たちはそのことを「どのように思っているのだろうか」、そして、「とてもとても想像の及ばぬことだと、思う」と、同じことを記述するのだろうか。慰安婦像によって日系の子どもたちがいじめに遭っているという報道に接して、「とてもとても想像の及ばぬことだと、思う」と、遠くを眺めているのだろうか。

私はそのように考えてきたが、高橋論壇時評はどのように進めるのだろうか。戦争体験者たちの大半が過ぎ去るなかで、経験していない者たちが《紙の資料に頼りながら、そこで発される、「単なる売春婦」「殺されたといってもたかだか数千で、大虐殺とはいえない」といった種類のことばに、わたしは強い違和を感じてきた。「資料」の中では単なる数に過ぎないが、一人一人がまったく異なった運命を持った個人である「当事者」が「そこ」にはいたの》であり、《だが、その「当事者」のことが、もっとも近くにおいて、誰よりも豊かな感受性を持った人間にとってすら「想像の及ばぬこと」だとしたら、そこから遠く離れたわたしたちは、もっと謙虚になるべきではないのだろうか。性急に結論を出す前に、わたしは目を閉じ、静かに、遙か遠く、ことばを持ってなかった人々の内奥のことばを想像してみたいと思うのである。それが仮に不可能なことだとしても。》

そう締め括られるが、この箇所でも高橋論壇時評は偏差がはなはだしい。時評子が古山と同じ小説家であるなら、どうして《「正義の告発」を始めた慰安婦たちの報道を前に、その「正しさ」を認めながら、古山は戸惑いを隠せない。》というその箇所にも、視線を向けようとししないのだろうか。《それは、ほんとうに「彼女たち自身のことば」だったのだろうか。》と、《ほんとうに、そうなのだろうか。》と、古山が小首を傾げている姿が跨ぎ越されて、ここでもいきなり「想像の及ばぬこと」へと読者を連れだし、誘導するなら、せつかく自分が引用し触れていながら、作品の中で小首を傾げている古山の姿に対しても、また高橋論壇時評が対話を欠損させたまま、一方的な自分の考えをそうとは感じさせることのない一見柔らかな口調で押しつけている読者に対しても、《もっと謙虚になるべきではないのだろうか》。

「慰安婦問題」は慰安婦たちが《「正義の告発」を始めた》ときから、政治問題と化しており、政治的言説のなかでは「彼女たち自身のことば」はますます深く喪失させられていくであろうことに、古山は小首を傾げていたのであり、彼の目にはかつての慰安婦たちは「正義の告発」の中でも殺されつつあるように映っていたはずだ。高橋論壇時評は本当は古山の作品の中の言葉に依拠して終わらせようとせずに、同じ小説家として彼が知ることのできない「慰安婦問題」という政治的言説が、海外各地における慰安婦像としてさまざまな影響を引き起こしている事態を視野に収めた時評を読者に提出すべきであるのに、問題の本質をぼやけさせ、はぐらかせようとしながら、朝日が直面している衝撃をやわらげようと苦心している点で自らの政治的言説を強化していることになるのだ。